

桃と『古事記』

PENG, Dan / 彭, 丹

(出版者 / Publisher)

法政大学国際日本学研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

INTERNATIONAL JAPANESE STUDIES / 国際日本学

(巻 / Volume)

6

(開始ページ / Start Page)

165

(終了ページ / End Page)

179

(発行年 / Year)

2009-03-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00022608>

桃と『古事記』

彭 丹

はじめに

伊邪那岐命は妻の伊邪那美命に会うために黄泉国へ行く。姿を見てはいけないという約束を破り、妻の姿を覗いてしまった伊邪那岐命は恐れおののいて黄泉国から逃げ帰ろうとする。すると、妻は黄泉国の醜女たちを遣わし夫の後を追わせる。男神は黒い御鬘みかずらを投げつけると、山葡萄の実となる。醜女たちがそれを拾って食べている間に男神は逃げる。それでもまた追いかけてくる。男神は右の御角髪おみづらにさしてある櫛を投げつけると、筍になる。醜女たちが筍を食べている間に男神はまた逃げる。今度は黄泉国の雷神たちが追いかけてくる。男神は、黄泉国と現世との境にある黄泉比良坂の麓にある桃樹から、桃の実三つを取って投げつける。

桃は見事に雷神たちを怯ませる。ようやく逃げ出すことができた伊邪那岐命は、桃に向かって、私を助けたように、葦原中国に住むすべての生ある人々が苦しみや悲しみに悩む時に助けてあげなさいと言い、「意富加牟豆美命おほかむづみのみこと」という神の名を賜る。そして、黄泉国の穢れを清めるために禊をする。左目を洗う時に生まれた神が天照大神。右目を洗う時に生まれた神は月読命である。鼻を洗う時に生まれた神は須佐之男命である。

大和王朝皇祖神の生みの親は桃に助けられた。『古事記』国造り神話に桃が絶大な役割を果たしている。桃がなければ、伊邪那岐命は黄泉国から逃れることができなかった。当然天照大神も生まれない。『古事記』国造り神話の鍵はこの桃にこそあるのではないかと思われる。

しかし、なぜ桃が雷神たちを追い払うことが出来たのか？ 小学館刊日本古

典文学全集の注釈には、「中国では桃は邪鬼を祓う威力を持つものと信じられていたが、その影響があるか。」と書かれている（小学館・日本古典文学全集『古事記・上代歌謡』66頁 注三十）。いかにも曖昧な説明である。

桃は中国の古代神話によく登場する。『古事記』の作者が、国造り神話の最も大事な中心部に桃を取り入れ、そして山葡萄、筍、桃の中で、桃だけに「意富加牟豆美命」という神の名を与える。これは、国造り神話と中国古代神話と何らかの関係を持つことを物語っているのではないかな？

この小論では、この国造り神話に取り入れられた桃を糸口にして、『古事記』と中国古代神話の共通の原点を探ってみたいと思う。

『古事記』の成立

紀元712年、中国では唐の玄宗皇帝即位の年に、太安万侶は元明天皇に『古事記』三巻を献上する。日本最古の歴史書としての『古事記』は、なぜ712年という年に作られたのだろうか、この問題を考えてみると、なかなか興味深いものがある。

紀元645年、中大兄皇子（のちの天智天皇）、中臣鎌足らは宮廷にて蘇我入鹿を暗殺する。蘇我蝦夷は自殺し、聖徳太子が編纂した歴史書だと言われる『天皇記』『国記』も焼失する。中大兄皇子は孝徳天皇を即位させ、自ら皇太子として実権を握り、鎌足を内臣として大化の改新に着手する。紀元663年、日本・百済軍は、白村江で唐・新羅軍に大敗し、百済は滅亡し、日本は朝鮮半島の支配を断念する。それから九年後の紀元672年、天智天皇が亡くなり、壬申の乱が起こる。叔父の大海人皇子は勝利を収め甥の大友皇子（弘文天皇）を自害させ、自ら天武天皇となる。587年の蘇我氏と物部氏との戦いにはじまる約百年にわたる内乱は、これで一応の結末がつく。

『古事記』の序文によると、即位した天武天皇は、諸家の伝える「帝紀」（天皇家の歴史）、「旧辞」（神話伝承）に虚偽が多いことを憂い、それを取捨選択して正伝を確立し、「邦家の経緯、王化の鴻基」として王政の大本にすることを企てた。そして、舎人の稗田阿礼に命じて、「帝紀」「旧辞」を誦習させたという。

これは、叔父としての天武天皇が、甥の大友皇子との血塗られた戦争を経て

手に入れた皇位の正統性を主張するために、天皇家の輝かしい歴史記録を残そうとした意図ではないかと思われる。王朝交代の際によくあることである。もちろん、壬申の乱は中国の異姓王朝の如き革命ではない。だが、征服者は被征服者の歴史を抹殺し、自らの手で新しい国造りの歴史を創り上げるところは共通する。

いずれにしても、歴史書の作成を可能にする文化的な土壌が大和王朝にあったと解せられる。その文化的な土壌はどのようにして生まれたのだろうか？言うまでもなく、『古事記』は中国の史書や古典を参考にして作られたものである。従って、その文化的な土壌は中国文化から生まれたものだと言うことができる。

ところが、この誦習の事業は天武天皇の崩御によって中絶してしまった。持統・文武両帝を経て即位した元明天皇は、再び太安万侶に稗田阿礼の誦習したものを撰録させる。壬申の乱から四十年も経ち、戦火の傷跡が癒え、経済が発展し社会も安定している。王政の大本を目指した新しい国造りの時代に相応しい『古事記』が、ようやく完成する。

元明天皇については、『古事記』の序ではこのように述べている。

皇帝陛下、一を得て光宅し、三に通じて亭育したまふ。紫辰に御して徳は馬の蹄の極まる所に被び、玄扈に坐して化は船の頭の逮ぶ所を照したまふ。日浮びて暉を重ね、雲散りて煙に非ず。柯を連ね穂を并す瑞、史書すことを絶たず、烽を列ね詔を重ねる貢、府空しき月無し。名は文命よりも高く、徳は天乙にも冠りたりと謂ひつべし。(小学館・日本古典文学全集・『古事記・上代歌謡』47頁)

賢明な女帝を褒め称えるこの一文から、私は「名は文命よりも高く、徳は天乙にも冠りたりと謂ひつべし」という言葉に注目したい。「文命」は夏の創立者禹の名前であり、「天乙」は殷の創立者湯の名前である。元明天皇の聖徳は夏禹・商湯よりも高いという。また、同じ序では天武天皇のことを「道は軒后に軼ぎ、徳は周王に跨えたまひき」と述べ、天武天皇の政道は黄帝・周文王武王よりも勝るといふ。中国の天子が素晴らしい。しかし日本の天子が中国より

もっと素晴らしい。『古事記』作者の中国文化への一種の対抗心が伺える。

当時の中日文化交流は中国から日本へという一方通行の時代であった。中国文化への憧憬は今更言うまでもない。鉄器、文字、書物、宗教などさまざまな先進文化を、この洋中の孤島に招来した大陸人は、当時の日本人の目にはまるで神様のように映ったかもしれない。『古事記』の作者もそのような日本人の一人であった。そして、中国文化を模倣しながらも、「青は藍より出でて藍より青し」の対抗心を持っていた。

そのため、中国古代神話の太陽神より更に力の強い天照大神を国造り神話に登場させようとして、桃を取り入れたと思われる。

中国古代神話における桃

桃は中国西北地方、黄河流域の上流地帯の原産である。『山海経』には、不周之山に「嘉果有り、其の実桃の如し」、辺春之山に「葱、葵、韭、桃、李多し」、岐山に「其の木桃多し」など、桃に関する記録が数多く見られる。また、近代考古学も、浙江河姆渡新石器時代遺跡、河南二里崗新石器時代遺跡、河北蒿城県台西村殷商時代の遺跡から、桃核を発見した（『詩経植物釈』8頁 三秦出版社）。

桃は「性早花、易植而子繁」（早く花咲き、植えやすく、実が多い）（明・李時珍『本草綱目』）の植物である。土壌が痩せ水も乏しい西北地方の厳酷な自然条件の中でも、桃は繁殖しやすく、結実も早く実が多い。原始採集生活の古代中国人にとって、桃はどれほど大事な食料であったのかは想像できる。そして、そのような桃は一種の神秘的な力を持つ樹木として重宝されていたと考えられる。

現に「桃」という漢字の形からも古代中国人の桃崇拜が窺える。『説文解字』（漢・許慎）によれば、「桃」は「果也从木兆聲」と解釈されている。「兆」は古代占トする時、焼いた亀甲や獣骨の上に現れる罅の形である。その罅の形を見て古代人は吉凶を占った。占トは神聖な儀式である。占トに使われる桃も神聖なものでなければならない。

桃が、このように神聖な性格を賦与され、それぞれの時代の空気に乗せられ、

中国古代神話に頻繁に登場してくる。その中で最も有名なものは西王母と桃の話である。

張華の『博物志』にこの話が記されている。西王母は七月七日に漢武帝の九華殿に降りてくる。七つの蟠桃（仙界にあるとされる桃）のうちの五つを武帝に与え、自分が二つを食べる。ちょうどその時、前漢の有名な文学家で武帝の近臣である東方朔は、隣の部屋の窓から王母と武帝の様子を覗き見ていた。すると、王母は「隣の窓から覗き見をしているやつは、三回も私の蟠桃園に桃を偷みに来たのだ。一つ食べるだけでも三千年の寿命がある」と言った。武帝は大いに驚いた。東方朔が西王母の仙果を盗んだ罪で、人間界に流謫されてきた謫仙人であることを初めて知るのである。

また、『論衡・訂鬼篇』が引いている『山海経』によると、滄海の中に度朔之山がある。山の上に大桃木があり、枝葉が三千里以外にも広がる。桃枝の東北は鬼門と言い、万鬼の出入りする所である。そこに神荼と鬱壘の二神人がいて、万鬼を治める。悪鬼を葦索で縛り虎に喰わせる。そこで、黄帝は儀式を制定し、時節ごとに鬼を駆除する。また、大桃人を立て、門戸に神荼、鬱壘、虎の絵を描き、葦索を懸けて凶鬼を防御する。

不老不死の仙果としての桃、邪気を祓う桃、いずれも時代が下がり、古代の桃崇拜から新しく生まれてきた道教的な土着信仰である。中国古代の桃崇拜は、これよりもっと根本的なところにあるのだと思われる。

桃神話の中で最古のものは『夸父逐日』である。

夸父與日逐走、入日。渴欲得飲、飲于河、渭。河、渭不足、北飲大澤、未至、道渴而死。棄其杖、化為鄧林。（『山海経・海外北経』）

（夸父 日と逐走、日に入る。渴きて飲を欲する。河、渭を飲す。河、渭足らず、北大澤を飲す。未だ至らず、道に渴死す。其の杖を棄ち、鄧林に化す。）

夸父は太古時代のある集落の首領である。ある日、太陽の光が届かなくなり集落は暗闇に包まれる。人々を厳寒と飢餓の中から救い出すため、夸父は太陽を追いかけていく。しだいに太陽に近づくと、喉が渇く。黄河、渭河の水を飲

み干しても足りない。北の大澤の水を飲みに行こうとしたが、辿り着かないうちに渴死してしまう。残された杖は太陽に照らされ鄧林に化す。鄧林は即ち桃林のことである。

自分の命と引き換えにしてまでも、夸父は太陽を追い求めた。古代中国人の太陽神信仰がここから伺える。そして太陽神信仰には桃と太陽との組み合わせがある。

桃と太陽

『淮南子』には、こんな話が記されている。

羿死於桃棗。棗、大杖、以桃木為之、以擊殺羿、由是以来鬼畏桃也。（『淮南子・詮言篇』許慎注）

（羿は桃棗に死す。棗は大杖なり。桃木を以て之を為し、以て羿を擊殺す。猶、是れ以来、鬼、桃を畏るなり。）

弓の名人である羿は桃棗に殺された。棗というのは桃木で作られた大杖のことである。それを以って羿を撃つと、すぐに羿は死んでしまった。それ以来、悪鬼は桃を恐れるようになる。

なぜ羿は桃棗に撃たれなければならないのだろうか？ 『芸文類聚』には、

『淮南子』曰、堯之時、十日並出、枯草木。堯命羿仰射十日。九鳥皆死、羽翼墮。（『芸文類聚・天部上・日の項』）

（『淮南子』に曰く、堯の時、十の日並び出て、草木焦枯す。堯、羿に命じ十日を仰射せしむ。その九鳥、皆死して、羽翼を墮す。）

ということが書かれている。『淮南子』に曰く、聖王堯の時、十個の太陽が空に出現した。草木を焼き、穀物を枯らし、食べ物がなくなる。その上、さまざまな怪物猛獣が山や澤から現われて人間を虐殺する。この災難を除去するために、堯は羿に、九つの太陽を射落すように命じる。羿は、命じられたとおりに、九つの太陽を射落す。すると、九つの太陽が三本足の鳥となり、ひらひら

と羽毛を散らしながら落下する。

空に太陽が一つだけになると、世界はまた正常に戻る。羿は弓の名人となり英雄として人々に褒め称えられる。だが、九つの太陽を殺したため、羿は太陽の恨みを買ったわけである。そんな羿は、復讐されて桃楳に殺されてしまったのである。

夸父逐日、後羿射日、この二つの中国最古の神話にも桃と太陽の組み合わせが現われている。桃と太陽、一体どのような関係があるのだろうか？

『荆楚歳時記』（六朝梁・宗懐）が引いた『括地図』に「桃都山有大桃樹、盤屈三千里、上有金鶏、日照則鳴」の記述がある。桃都山に大桃樹あり、盤屈三千里。上に金鶏あり、日照らば即ち鳴くという。

この話は魯迅の『古小説鈎沈・玄中記』にも見える。『古小説鈎沈』は魯迅の編纂した小説資料書であり、漢から隋までの古代小説を収録している。それによると、「東南有桃都山、上有大樹、名曰桃都。枝相去三千里。上有一天鶏、日初出、光照此木、天鶏即鳴、群鶏皆隨之鳴」である。東南には桃都山があり、上に大樹がある。其の名は桃都と呼ばれ、枝を張り三千里にも及ぶ。木の上には一羽の天鶏がいる。太陽の光がこの木を照らせば、天鶏はすぐさま鳴き出す。すると天下の鶏もそれに従って鳴き始める。

大桃樹に住む天鶏（金鶏）が太陽を導き、夜明けの到来を人間に知らせる。天地を支配する偉大な太陽神に仕える桃と鶏が、古代中国人にとって太陽の化身であり、聖なる神様である。そのため、桃という字のつく地名が方々に見られるし、青銅器や陶器などに鶏をかたどるものがたくさんある。

つまり、中国古代神話の中で、桃が太陽神の象徴である。

天照大神と桃

『古事記』にもどると、『古事記』の作者は、天照大神という新しい大和王朝の最高女神を描こうとした時に、中国の最高女神の女媧を念頭においていたのだと思われる。

『説文解字』によれば、「媧、古之神聖女、化萬物者也」とあり、女媧は萬物

を養育する古代の神女であるという。また、『太平御覧』には、「俗説天地開闢、未有人民、女媧搏黄土作人」と記されている。天地開闢まだ人間がこの世に生まれていなかった時、女媧は黄土から人間を創り出したのである。そして、

往古之時、四極廢、九州裂。…（略）於是女媧鍊五色石以補蒼天…考其功烈、上際九天、下契黃壚、名声被後世、光暉薰萬物。（『淮南子・覽冥篇』）
（往古の時、四極が廢れ、九州が裂かれる。…（略）是に於いて女媧 五色石を鍊し蒼天を補う。…其の功烈を考すれば、上は九天に際し、下は黃壚に至る。名声 後世を被い、光暉 萬物に薰る。）

昔、天が壊れ地が裂けたことがあって、女媧は五色石で天を補修した。彼女の功績は、上は九天に至り、下は黄泉に届く。名声は後世に伝えられ、光輝は萬物を照らす。

このように光輝が天地に満ち溢れる最高女神の女媧が、太陽神伏羲の妻であり、月神である。漢代の画像磚に女媧と伏羲の画像がよく見られる。伏羲は三本足の鳥がいる太陽を手に捧げ、女媧は蟾蜍ひきがえるがいる月を捧げている。

しかし、『古事記』作者は女媧をそのまま国造り神話に取り入れなかった。というのは、女媧は月神であったのだから。

古代中国の男権至上の考え方によれば、月神が優しい女性のイメージで、太陽神は逞しい男性のイメージでなければならない。だが、時の天皇は元明女帝である。彼女の功績を褒め称えるために『古事記』の作者は太陽神の女神が必要であった。「日浮びて暉を重ね」、元明天皇の徳が太陽の輝きのように天地に満ち溢れるという。そこで、彼らは、伏羲女媧の両神を一人にして、それを天照大神に移植したのである。

そのため、天照大神は高天原に君臨し、神々を治めながらも、結局弟須佐之男命の乱暴に対しては、天の石屋戸に閉じこもり恐れることしかできなかった。つまり、彼女には、太陽神の陽と強さとともに、月神の陰と弱さも持ち合わせていたのである。

中国文化の伝統は絶対的な強さ、翳りのない明るさを美とするが、陰翳と弱さを持ち合わせた強さが好まれる日本文化の原点は、この天照大神の性格から求

めることができよう。中国文化の上に築き上げた日本文化の大きな特質である。

このように、『古事記』作者は中国古代神話を参考にして、女神天照大神を国造り神話の最高位に就かせた。そして、その天照大神を女媧のように、否、女媧よりも威力のある女神にするために、中国の太陽神の力を借りたのである。それが、桃である。

日本には元来桃がなかった。同じ「桃」の字がつく山桃は古くからあったらしいが、『和名抄』に「状如莓子赤色、味酸甜可食之」とあるように、味が甘酸っぱくて恐らく当時の桃の味と似ているだろう。また、人工で栽培する桃と違い山野に自生しているため、山桃という名前がつけられたのかもしれない。とにかく、山桃と桃とは全く異なる植物だと言えよう。

黄河流域原産の桃が何時の時代に日本に渡来したのか、それを記録する文献は今のところまだ見つかっていない。三世紀の『魏志倭人伝』に「桃支」という言葉があるが、桃と関係があるかどうかは不明である。だが、五世紀頃六朝梁の任昉によって編集された『述異記』に、「日本国有金桃、其实重一斤」の記述がある。そして、北村四郎によれば、桃核が弥生式土器と共に出土されている（「栽培植物の起源・伝来・分類」56頁『北村四郎選集Ⅲ 植物文化史』保育社）という。

いずれにしても、桃の渡来は大陸との交流が始まってからの話であり、神代時代には桃がなかった。従って、古来の天照大神に纏わる民間伝承の中には桃がないと考えるべきである。

天つ神に命じられ、伊邪那岐命と伊邪那美命は天の沼矛を持ち、脂のように水母のようにただよう国土を固める。固まった淤能基呂島に両神は降りて結婚する。結婚した両神は大八島国などを生み、更に新たな神を生むことになる。そして、最後に火の神を産んだことが原因となり、伊邪那美命は命を落とす。ここから伊邪那岐命の黄泉国訪問の話が出てくる。

中国古代神話では、桃は太陽神の象徴である。その太陽神の力を借りれば、大和の太陽神もより一層力強くなる。大和王朝も大陸の王朝のように強大になり、万世に続くことが出来るに違いないと、『古事記』作者は考えた。そのために、桃を取り入れたのである。

こうしてみると、自分を助けたように葦原中国に住むすべての生ある人々を助けてあげなさいという伊邪那岐命が桃に言った言葉の意味もわかってくるし、「意富加牟豆美命」という神の名を賜ることも納得できる。つまり、桃は中国の神様である。この外来の神様に、葦原中国の大和の人々にもご加護をくださいますようと祈り、大和の神様の名前をつけてあげる。これは正に、日本に帰化する外国人が日本人の名前をつけなければならない現代のことに相通するように思う。

つまり、桃と天照大神との結びつきは、中国古代神話にその原点があった。『古事記』を作り上げた学者は、大和の国造り神話に中国の古代神話をたくみに組み込んだのである。

神武天皇と赤烏

天照大神の子孫として、『古事記』が語る人間天皇の初代神武天皇は、兄の五瀬命とともに日向から東征の船を出す。途中、河内土豪の登美毘古との戦いの中で五瀬命は負傷し、紀伊の男之水門で落命する。熊野に上陸した神武天皇も、大熊の毒気に当てられて気を失う。高倉下^{たかくらじ}は夢の中で天照大神から授かった霊剣を献上し、霊剣によって神武天皇は正気を取り戻し、熊野山の荒ぶる神を倒す。そして、

是に亦高木大神の命以ちて、覺して白したまはく、「天つ神の御子、此れより奥つ方に莫いり幸でまさしめそ。荒ぶる神甚多なり。今、天より八咫烏を遣はさむ。故、其の八咫烏引道きてむ。其の立たむ後より幸行でますべし」とまをしたまひき。故、其の教へ覺しの隨に、其の八咫烏の後より幸行でませば、吉野河の河尻に到りましき。時に釜を作りて魚を取る人有り。(小学館・日本古典文学全集『古事記・上代歌謡』154頁)

神武天皇は八咫烏に導かれ吉野に入り、各地の国つ神に臣従させ、大和王朝を建国したのだという。八咫とは大きい、八咫烏は三本の足を持つ大きな赤烏のことである。

赤鳥と言えば、桃と同じようによく中国古代神話に登場する。

湯谷上有扶桑、十日所浴、在黑齒北。居水中、有大木。九日居下枝、一日居上枝。（『山海經・海外東經』）

（湯谷の上に扶桑有り、十の日 所浴す、黒齒の北に在り。水中に居り、大木有り。九の日 下枝に居り、一の日 上枝に居る。）

湯谷上有扶木、一日方至、一日方出、皆載于鳥。（『山海經・大荒東經』）

（湯谷の上に扶木有り。一の日まさに至り、一の日まさに出でる。皆鳥に載せる。）

湯谷の上に扶桑の大木がある。その木は水中にあり、十個の太陽がそこで沐浴する。そのうちの九個は下の枝に住み、一個だけが上の枝に住む。太陽たちは三本足の赤鳥に載せられて毎日交代で空を飛ぶ。一個の太陽が戻ってくると次の太陽がまた出かける。

扶桑は神話伝説の神木である。扶木は即ち扶桑のこと。東方朔の『十洲記』によると、高さが数千丈もあり、二本ずつ同じ根から生え、互いによりかかっている。

この太陽、赤鳥と扶桑の組み合わせから、当然のことながら、先に述べた太陽、鶏、桃樹の組み合わせが思い浮かぶ。太陽を載せる三本足の赤鳥、太陽の上昇を導く金鶏、そして、扶桑も、桃樹も、共に太陽の化身であり、聖なる生物である。中国古代神話の中の太陽・金鶏・桃樹と太陽・赤鳥・扶桑との組み合わせが見事に一致する。

また、『淮南子・精神訓』に「日中有踰鳥」と記されている。踰鳥とは三本足の鳥のことで、また赤鳥、金鳥、陽鳥とも呼ばれる。後羿射日の神話にも、羿に射落とされた九個の太陽が三本足の鳥となり、ひらひらと羽毛を散らして落下する。そして、前にあげた漢代の画像磚に画かれている太陽神伏羲も三本足の鳥がいる太陽を手には持っている。

つまり、古代中国では、太陽に三本足の鳥がいるという話は広く知られ、その赤鳥が桃と同じく太陽のシンボルであったことがよくわかる。そのため、赤鳥はよく王朝創立者と結びつき、赤鳥が現われれば瑞兆と見られる。

『史記・封禪書』によれば、黄帝は土徳だから黄龍が現われる。夏は木徳だから青龍が現われる。殷商は金徳だから銀が溢れる。周は火徳だから、赤烏が五回も飛んでくるといふ。また、

赤烏銜珪、降周之岐社。（『墨子・非攻下』）

（赤烏 珪を銜え、周之岐社に降りる。）

周王朝が興起する真際に、赤烏は剣形の玉器を銜え、周の岐社に降りてくる。さらに、

武王渡河、中流、白魚躍入王舟中、武王俯取以祭。既渡、有火自上復于下、至于王屋、流為烏、其色赤。（『史記・周本紀』）

（武王渡河、中流に至る。白魚 王舟の中に躍入り、武王 俯き取り以って祭る。既に渡り、火有り上から復下に、王屋に至る。流れて烏と為し、其の色赤。）

殷紂討伐に向かう周武王が黄河を渡った時、白魚が武王の乗っている舟に飛び込んできた。それを捕まえ祭った。河を渡り終った時、火が上空から流れてきて王屋に当たり、三本足の赤烏と化した。それから武王は殷紂を滅ぼし天下を統一し、八百年続いた強大な周王朝の開国之君として、古代の聖王の範と仰がれている。

『尚書大伝・大誓』にも同じような「武王伐紂、觀兵于孟津、有火流于王屋、化為赤烏、三足」（武王伐紂、孟津にて兵を觀る。火有り王屋に流れ、赤烏と化す。三足。）の記録が見られる。

そして、後漢王朝の創立者光武帝も、王莽との戦いの最中に、道に迷った時、赤烏に導かれ最後は王莽を破り、後漢を建立した話が残されている。

中国の周武王、光武帝、そして日本の神武天皇。太陽神の赤烏と関連しているこの三人の開国君主の名前には、同じ「武」の字がついている。果たしてこれが偶然かどうかはここでは論じない。時間の順序を考えれば、周武王、神武天皇、光武帝である。しかし、光武帝を記した『後漢書』は、神武天皇を記し

た『古事記』より三百年あまり昔に書かれたため、二人の人物の比定ができない。寧ろ、神武天皇も光武帝も、赤烏に象徴される太陽神にあやかり、聖王の周武王を真似したと考えたほうが適切かもしれない。

そして、神武天皇は「釜を作りて魚を取る人」に臣従させた。周武王の一匹の白魚ではないが、魚を司る国つ神がここで登場するのは意味深長なものである。更に、八咫鳥の八咫に注目すると、周武王の赤烏を標準にして、それよりも大きいという意味を、私は読み取ったのである。

このように考えると、『古事記』作者は周武王のことを念頭に置き、一種の対抗意識を持って神武天皇のことを記したのだと思われる。八咫鳥の登場が、桃の登場と同じように『古事記』作者のこの意図を反映していたのである。

むすび

紀元 701 年、大宝律令が發布され日本は律令国家としての体制を固める。時代は正に、新しい国造りの時代であった。紀元 707 年、賢明な女帝・元明天皇が即位する。年号を和銅と改め、貨幣の鑄造を始め、奈良に遷都する。そのような時代を背景にして、天皇家の輝かしい歴史記録として、王政の大本としての『古事記』が完成される。

天照大神生みの親伊邪那岐命は桃に助けられる。そして自分を助けた桃に大和神様の名前を賜る。大和王朝の創立者・神武天皇は大きな赤烏に導かれ吉野に入る。

中国古代神話の太陽神のシンボルである桃と赤烏を取り入れたことで、『古事記』の作者は、中国の太陽神信仰を大和王朝の歴史書にたくみに組み込んだのである。つまり、『古事記』の国造り神話と中国古代神話は、共通の太陽神信仰の源をもっている。それは、中国の太陽神に守られている強大な王朝にあやかり、新しい大和王朝の国運を祈る『古事記』作者の願いでもあった。

しかし、一方、『古事記』の作者は中国文化を貪欲に吸収しながらも、更にそれを超える世界を創ろうという野心を持っていた。中国の最高女神女媧に重ねつつ女媧と違う太陽神の天照大神を創り、中国で聖王と尊敬された周武王を意識しながら神武天皇の大和王朝の建国を記述したのである。

千年前の『古事記』の作者は、このように中国文化の上に独自の日本文化を作り上げた。しかし、例えば神武天皇の八咫鳥の話は、明らかに中国太陽神信仰の影響があるのに、なぜか、小学館・日本古典文学全集『古事記・上代歌謡』の注釈にしても、岩波文庫・『日本書紀（一）』の注釈にしても、一言も触れていない。中日比較文化研究のもう一つ興味のそそられるところはここにあるのだ、と私は考える。

<ABSTRACT>

Peaches in the *Kojiki*

PENG Dan

The *Kojiki*, Japan's oldest book of history, was finished in 712, in the context of the nation's foundation. In it, Amaterasu Ōmikami's father Izanagi, the greatest god of the Yamato dynasty, is helped by three peaches. And Emperor Jinmu, the founder of the Yamato dynasty, is guided by a red crow. What is the significance of the peaches and the red crow in the *Kojiki*?

Both the peaches and red crow were borrowed by the authors of the *Kojiki* from ancient Chinese mythology, where they are symbols of the sun god. In this fashion, Chinese sun worship is incorporated into this historical account of the Yamato dynasty. It was a strong desire of the authors of the *Kojiki* to acquire the grace of a sun god like that of the great dynasties of China. Moreover, the ambition of the authors of the *Kojiki* to assimilate the learning of Chinese civilization inspired them to use language that might even surpass it in excellence.